

岩手美術界の指導者

五味清吉

五味清吉は、東京美術学校西洋画科を首席（第一位の席）で卒業後、官展（政府主催の展覧会）にすぐれた作品を多数発表し、ロマンチックな味わいのある雰囲気と豊かで美しい色どりで印象派画家（ものごとから受けた瞬間的印象を強調し、そのまま表現する芸術家）といわれた。東京に住みながらも、展覧会の開催や出品など、盛岡にはしばしば足を運び、岩手の洋画界の発展に大きく貢献した。一九四二年（昭和一七年）に左半身不自由となるがなおも絵画制作を続けた。

五味清吉は、一八八六年（明治一九年）一月一日、盛岡市四ツ家町（現在の本町通り）に小原藤吉、タキの三男として生まれた。兄、姉がそれぞれ二人と、弟一人がいた。五味姓を名乗るのは、二番目の姉が嫁いだ前沢町の五味鼎三の養子となった一九一〇年（明治四三年）ころからである。

清吉は、幼いころから絵が好きで、遠足に行っても独りで木のき

れはしで黒い土に勝手に絵を描いたり、握り飯の包み紙に梅干しを塗りつけて日の丸を作ったりしていた。清吉はよく熱中する性格で、好きになると夢中になる一面があったようだ。

一九〇六年（明治三九年）、盛岡中学校（現在の盛岡第一高等学校）時代はキリスト教に夢中になり、市内で伝道に熱中した。盛岡中学校を卒業し上京（東京へ出ること）、洋画家の大家（その道ですぐれた人）である岡田三郎助の洋画研究所で学んだ。

一九〇八年（明治四一年）には、東京美術学校西洋画本科（現在の東京芸術大学美術部絵画科）に入学した。翌年に父、二年後に母と死別した。この間に弟の進学も重なり生活が苦しくなり、東京に転校した弟と妹の三人で一緒に暮らしている。養子縁組はこうした時である。在学中から文部省美術展覧会（文展）に出品する。一九一〇年（明治四三年）、三年生の時に「煙」という作品で初入選を果たした。翌年に「秋の訪れ」、一九一二年（大正元年）に「たけに草」と続いて入選して画壇にデビューし、将来が期待された。

太平洋戦争前の五味は東京を中心に活動したが、故郷岩手の美術団体とも関わり続けた。一九一〇年（明治四三年）に結成された「北虹会」をはじめ、清水七太郎らが結成した「七光社」や、東京にいる岩手県出身の画家を中心に結成された「北斗会」などに出品

している。彼の誠実な人柄は後輩たちに親しまれたが、五味自身も彼らの指導に努め、亡くなるまでずっと岩手美術界の中心的な存在であった。

一九一九年（大正八年）、根子キクと結婚した。一九二〇年（大正九）年、文展に代わった帝国美術院展覧会（帝展）出品の「常楽雅浄光」という絵が落選したことに勇気をふるい起こし、黒田清輝の奨めでフランス留学を決意した。パリの有力公募展のサロン・ドートンヌに「うないおとめ」が入選した。以後二か月ほどかけてドイツ、チェコスロバキア、オーストリア、ハンガリー、イタリア、ベルギーを訪れて作画した。帰国後、五味は日本の伝統を基本の中心とし、それに洋画の絶妙な（きわめてたくみな）色彩を生かした絵を残すようになる。

一九二一年（大正一〇年）、五味は「七光社」の展覧会に「裸婦」という作品を出品する。上品で美しい裸婦像は五味が得意としていたものであった。この作品は風紀（日常の習慣についてのきまり）を乱すということで、警察より取り払うことを命じられた。これは展示会場から作品が取り払われたという岩手県最初の記録となっている。

中国へは、一九二三年（大正一二年）から一九四一年（昭和一六

年）までの長い間にわたって度々訪れ、土地の雄大さを実感した。

岩手の関係画では啄木記念館の「石川啄木」、前沢町蔵の「先人五人像」、岩手の洋画家で分担して描いた古都平泉画で「秀衡義経対面図」などがある。また、菊池陽一氏により贈られた文展招待作品の「晩秋果物」が前沢中学校にある。

一九四二年（昭和一七年）一月、清吉の最も制作意欲の盛んな五六歳の時に、突然脳溢血に倒れ、左半身が不自由となってしまった。幸いにも絵筆を握る右手は動かすことができたため、病床で絵を描き続けた。その後の経過が心配されたが、清吉は「右が効くだけでも幸い、さもないと、もう一度勉強しなかなければならなかった。」と言って絵を描く情熱は捨てなかった。一九四三年（昭和一八年）の新文展第六回展出品の「鏡裏形影」は、病気からある程度回復した時の自身の姿をそのまま飾らずに描いた作品である。自画像はやつれた表情であるが、病気でもなお絵への意欲を持ち続ける執念を伝えている。病床にあっても毅然とした清吉の信念を貫く激しさが表現されている。

太平洋戦争末期の一九四四年（昭和一九年）、東京のアトリエを処分して盛岡市の菜園に疎開（空襲や火災の被害を少なくするため都市から地方へ人口を分散すること）し、友人の世話でアトリエを

再開した。以来県民に親しまれ身近の果物、野菜、花などを歳月を惜しみつつ描いた。

一九五四年（昭和二九年）に六八歳で盛岡で亡くなった。岩手へ洋画を導いた功績（意味のある大きなはたらき）を称えようと、知人たちの希望で県で初めての美術葬が営まれ、「洋画絵描きの元祖」といべき人の死を人々は惜しんだ。

*五味清吉の作品をみたい人は、牛の博物館（奥州市前沢区字南陣場）を訪ねてみてください。代表作「ひめむかしよもぎ」「花」その他多くの作品があります。また、県立博物館（盛岡市上田松屋敷）の近代美術展示室を訪ねてみてください。

*参考文献

『五味清吉の生涯 岩手県洋画壇の指導者・生誕百十一年』

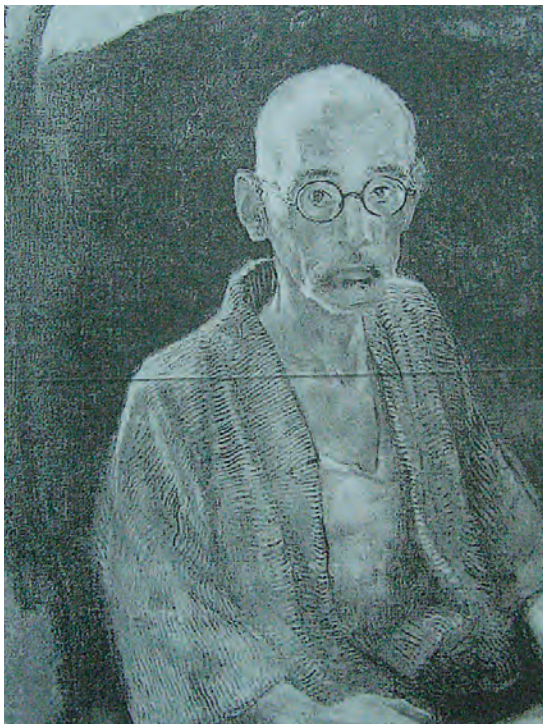
本平次男 著 胆南新報社

『写真に賭ける情熱』

前沢ゆかりの五味清吉展 前沢町合併四五周年記念』

前沢町立牛の博物館ほか編集 前沢町立牛の博物館

ウェブもりおか 盛岡の先人たち 五味清吉 インターネット



《鏡裏形影》昭和18年（1943年）作
（岩手県立博物館蔵 近代美術作品集より）